

## 〈学位請求論文要旨〉

### 超自然的存在に対する信念が心のゆとりに与える効果 ——妖怪の社会的機能を含む媒介変数の検討——

社会学研究科 社会心理学専攻 博士後期課程  
4550190003 高橋 綾子

本研究の目的は、超自然的存在に対する信念が心のゆとりに与える効果を検討することである。科学の進歩によって大変便利で豊かな生活を手に入れた私たちが求めてやまない精神的な充足やゆとりとは一体どのようなものであり、どうしたら手に入れることができるのだろうか。本研究はこの問いに対して、超自然的存在に対する信念と心のゆとりとの関連に着目し、現代日本人の心のあり様を考察する。

日本には古来、身近な年長者から伝えられてきた伝統的な価値観が数多く存在する。文化資源として取捨選択されながらも保持されてきたこのような価値観は、いまだ日本人の精神的基盤として機能していると考えられる。それらには多くの超自然的なものが含まれるが、科学の進歩に伴い、人が自ら統制できない出来事は減少し、次第に存在意義が失われていったように感じられている。一方、近年の調査結果は私たち日本人の基底に超自然的なものを求める意識がいまだ維持されていることを示している。その心理的背景として、人々が受け入れ難い出来事に直面したとき、ものごとがどのように起きたか、という「過程／how」だけではなく、なぜそうなったのか、という「理由／why」を求めるといふこと、そして「過程／how」だけでなく「理由／why」をも担っていたのが、かつての妖怪や超自然的存在であることが推測される。すなわち、現代では主に科学が担っている「過程／how」の説明では補うことのできない「理由／why」を得ることが出来事の受容や精神的な回復へと繋がるのではないか。それゆえ私たちは「理由／why」をも引き受ける超自然的なものに身をゆだねるのではないだろうか。

本論は以上の議論に基づき、現代日本人の心のゆとりに影響を与える要因のひとつとして、超自然的なものが担っているであろう「理由／why」に着目し、「日本における素朴な宗教心に基づく伝統的な価値観およびそれが含有する超自然的なものに対する信

念が、日本人特有の出来事に対する捉え方（＝受容性）を導き、その結果、心のゆとりに影響を与える」という仮説モデルの検証を試みるものである。

研究1では新型コロナウイルス禍で急速な認知の高まりをみせた妖怪『アマビエ』に対する人々の態度を通して、現代において妖怪がどのような社会的機能を持ち得るのかを検討した。ここでは、娯楽の側面が強調されてきた現代の妖怪に、超自然的な力を持つものとして尊崇と畏れの対象である面が潜在的に保持されてきた可能性が示された。

研究2と3では、現代の人々において、日本の「伝統的価値観」と「認識」されているものの考え方、感じ方を整理し、それらを測定する尺度を構成した。加えて、具体的な日常的宗教行為（おみくじをひくなど）を測定する日常的宗教行為尺度の作成を試み、両尺度間の関連性から伝統的価値観といかに関わるかを探索した。測定項目を作成して実際に調査を行うと、意外に多くの人々がそれらの言説を承認している実態が見え、それらの信念が日常的宗教行為と強い関連をもつことが確認できた。この尺度によって日本的な伝統的価値観がもれなく扱えているものとはいえないが、日本固有の宗教性を適切に汲み取るべく、表出されにくく自覚されにくい素朴な宗教心を具体的に測定可能な形で示すことはできた。

研究4では本論における仮説検証の予備的研究として、伝統的価値観が心のゆとりに与える効果を媒介すると考えられる受容性の下位概念を検討した。研究4-1、4-2、4-3と探索的な検討を重ねた結果、本論における受容性の下位概念として、特性感謝、適応的諦観、自己の存在価値を用いることとした。

研究5では、研究1から4の結果を踏まえ、我が国で古来伝えられてきた伝統的価値観に含まれる超自然的存在に対する信念が、出来事に対する日本固有の受容性を媒介して心のゆとりに影響を与えるという仮説モデルの検証を試みた。モデルの係数、適合度からは一定程度の効果が確認でき、本論における仮説は支持された。

以上の結果をもって、素朴な宗教心に基づく伝統的価値観、ひいては、それらに含まれる超自然的なものへの信念が、日本独自のしかたで出来事への適切な対処方略を導き出し適応する受容性という心理的能力を媒介し、心のゆとりに影響を与える効果の一端を示すことができたと考える。精神的健康と心のゆとりが強く関連していることや、心のゆとりを維持することの重要性は先行研究でも共通して述べられており、伝統的価値観が心のゆとりの一側面に寄与していることは、現代日本人の求める精神的な充足や豊

かさへとつながる手がかりとなるかもしれない。ただし、伝統的価値観との関連が見い出されたのは、心のゆとりの「心の充足・開放性」、「対他的ゆとり」のみであり、「切迫・疲労感」については検証に至らなかった。実証的な研究がないため推測にとどまるが、「切迫・疲労感」は外的要因の影響を受けやすく、「心の充足・開放性」、「対他的ゆとり」とは次元が異なる可能性がある。今後は心のゆとりの各下位概念にどのような心理変数が影響しているかを詳細に検討する必要があるだろう。

現代の科学的立場から見れば、非科学的な信念は実生活に悪影響を及ぼすものと考えられがちであるが、本論での試みは、従来の心理学的研究では扱われてこなかった非科学的信念の肯定的な側面、とりわけ超自然的存在の有用性を明らかにできる可能性を秘めている。こうした機序による精神的健康への影響が適応的かどうかはさらに検討を進めていかなければならないが、非科学的なものを否定しすぎたり、過信して振り回されたりするのではなく、人々がより良く生きるための適応的方略として、半信半疑でつき合いながら日常的効果を得ていくという新たな共存の枠組みを示すことのできた意義は大きいと考えられる。本研究が日本固有の素朴な宗教心に根ざした伝統的価値観と、それに基づく生き方態度や精神的健康のあり方への議論の一助となることを期待する。